未知語

二十五

歌を名こそらし

Murasaki Shikibu

[v. 41]

[Kyoto, 1654]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 41
copy 1
Asian
Japan
Case

2004551302

春のひかりをしぬふにつけてもいとどくれまどひ
（源氏五十二才の正月より十二月までを　二条陰にてくらん）（源ム）
たるやうにのみ出ふろひとつはかなしされあら
たまるべくもあらぬに（かゝ）かゝる（おん発ニ源女ニ御給ふとを）何のやうに人ぞ来り
ぬひなどすれど出心ちなやましきに夜にもて
なしぬひて三寸のうちにのみおりします（蛍）昔の
家ひたりのへるにぞこぞうちとけたりたまて
對面し給いんとて出きうそこにたてぬふ
（源）まが宿は蛍もてもやまし人もなしなりたう出
のたゞみたろしん（蛍）家うち泪ぐしぬひて
（蛍）番をとめてきつるかひなく大かたのたるれ
さどりといひやるすべきこうどいのきたにあ（蛍ノ）ゆゑ

ひとりねにありて いとあはぞうにもてなし
めて よろのれとのねなどにも これれと何まるを
なましのあるりひきさげつてさつしもをぬふ
つれぐなるまくに いかしへの物紙なるどしたまふ
おりくもあり 名所なきれひだり心のふくなるも
りにつけても さしもありたりまじかりける
ことにつけつ 中ごろ抱うしめしうあはしたる
気色の時ぐしく給しなど紙当し 出るに なるどて
こもふれにても 又まめやかに心ぐるしきことに
つけても さやうなる心をこしなりそんなるごとにも
らうくじうあはせし れ心ぐへなるもしかは

人のふるき心もいとようこそあるのひなぐらしこそんじ
もて給ことはなかりしかど、ひとつゝるをげくも
いかなるんとすらんと思しかりしに、すこしに
ても心をこゝろのひかんことはいとおしうらや
しうおぼし給さ侍、むつかりもあまる心ちし給
それありのことは心をもたり、い侍もちかうつかう
まつる人ぞは、ほのぐ罪し出る事あり、入道の宮(女三)
ひとりたゞめのへりしほど、それありはたゞ(法ノ)宮には
史よいぐし給はざりしかど、ことなりふれけく
あぢきなれけざやと、心のへりし気色の衰なり
しやまも、雪ふりくらし暁(あつき)よこちやすらひて、我身も

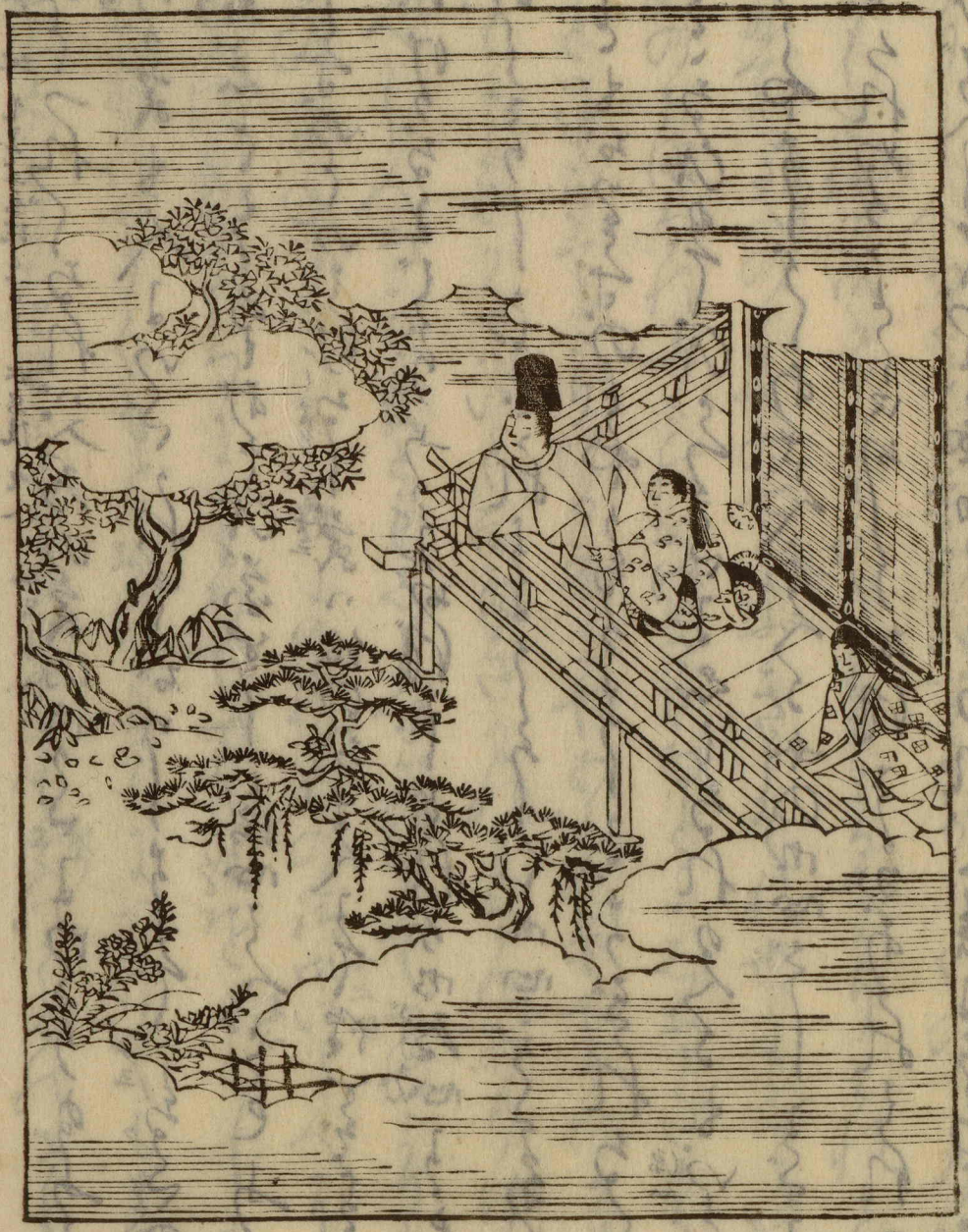
ひえ入やうにおぼして、宅のかしきまぐしらしに
いとなつしうおひしかなるもれかし。袖のいろう
なきぬらしぬへりけるを。ひきかくして。さめて
まぎらしぬへりし程のよういなどを。夜も
すがら夢にも又いかなるんせりかとおぼし
つゞけらる。明(地)ぼのましもざうしにおるし女房
なるべし。いうじうもいまりにける雪かれといふ紙
につけぬへる。ふぐ(深ん)それありのうちすうり。此
うたまちのさびしきもいふかなくかなし
うき世には雪清(きえ)なんとせひつてせひのほかに
なる紙ぞほどふる。例(地)のまぎらしには此てうげ

遊びつゝこゝひすぐさずやありけん。いとかくさゝ
いさゝゝとよせて。なれも罪ざりけるを。かくうを
ゆて後ハ。それかくまはあらず。人よりゝとまらう
ゝさ抱ゝ心とゞめ覚しかりし抱をとおぼし出る
まつけて。かれ此形見のすぢをぞ。衣と覚しかる。
心ぢをかくちなどもめやすくて。うなひまつゝ覚
しかけまひしぐおしまましよりハらうくしとおも
ほしうとさ人まはさしまえ給ひず。上遊ばなども
むつましき。又此ましかれ家ちなど。花ゝ来り
あへれど。ふいめしし給とおさくなし。人ハ
むかもんほどぢりハさうしくふしびめ。こうちおさ

稀(まれ)にもうちはのめきぬふるつけてはえいとをさ
がらさ。洞のあめのこゝりまされば。いとつりあるくて。
いづくにもおぼつかなきさ海にてゐし給。(明石中宮)(地)ささいの
家いうち(今に)まいしをなて。この家(白)をぞさうぐしさ
れあるくさめにはおいしまきせこまひけり。ぞしぐ(紫)乃
のなひしらばとて。(紫ノ方ニ二条院ヲ云ヘシ)さいのおまへの紅梅。とりつきて
うしろもありきなへる紙いと(添ふ)衣とこゝてまつり
給。(地)ささしぎるあれば。常のまだのさうりにあるも。
まぐしきも未来ありしう霞つゝれるに。かれは
形見のこうもいに。萬のもあやうにあるさしられば。
(添ノ)こちはてはしんぞ

(係)うへてこし菊のあるじもなき宿にしらずがほ
よてきゐる鶯(地)とうそふきありを給ふ。春ふかく成
りましにおまへ(係)の事様いましへりかもしぬを。
めでぬふるまはあしほど。志げ心なくおまじとる
つけてもむほいたうおぼさるれば。大かたこの世の
外のやうに鳥の声もきこえざらん山のすゑ。夜
しうのミいとゞ成まさりぬふ。山ぶきなどの心ち
よげに咲こゞれたるもうちつけに家けくのミ
これされぬふ。ほかれ菊は一重ちりて八重さく菊
様さかりすぎてかぐし様はひらけ。夜はをられている
つきなどこそいすゐるを。そのをそくとき菊の心を

ことに、まがくしうのぬふとて、ぶしめるなりて、れぞの
袖をひきまさぐりなどして、まぎらしりおいす。すこ乃
まれかうらんをしかりて、おまへの座をもこすのうち
をもこまうしてながめ給、女房などもかれれかるこれいろ
かへぬもありれいのいろおひなるもおやなどもか
やかはあらず。分づくのれなをしもいろもよれ
つゐなれどことさらにやつしてむもんをなれりれ
しろしひなどもいとをろそかにことそぎてさびし
くもれころぼそげにしめやかなれば
今いとてあらしやもてんなさへの心とぐめし
しのうされを人やるなしずかなしうおぼさる

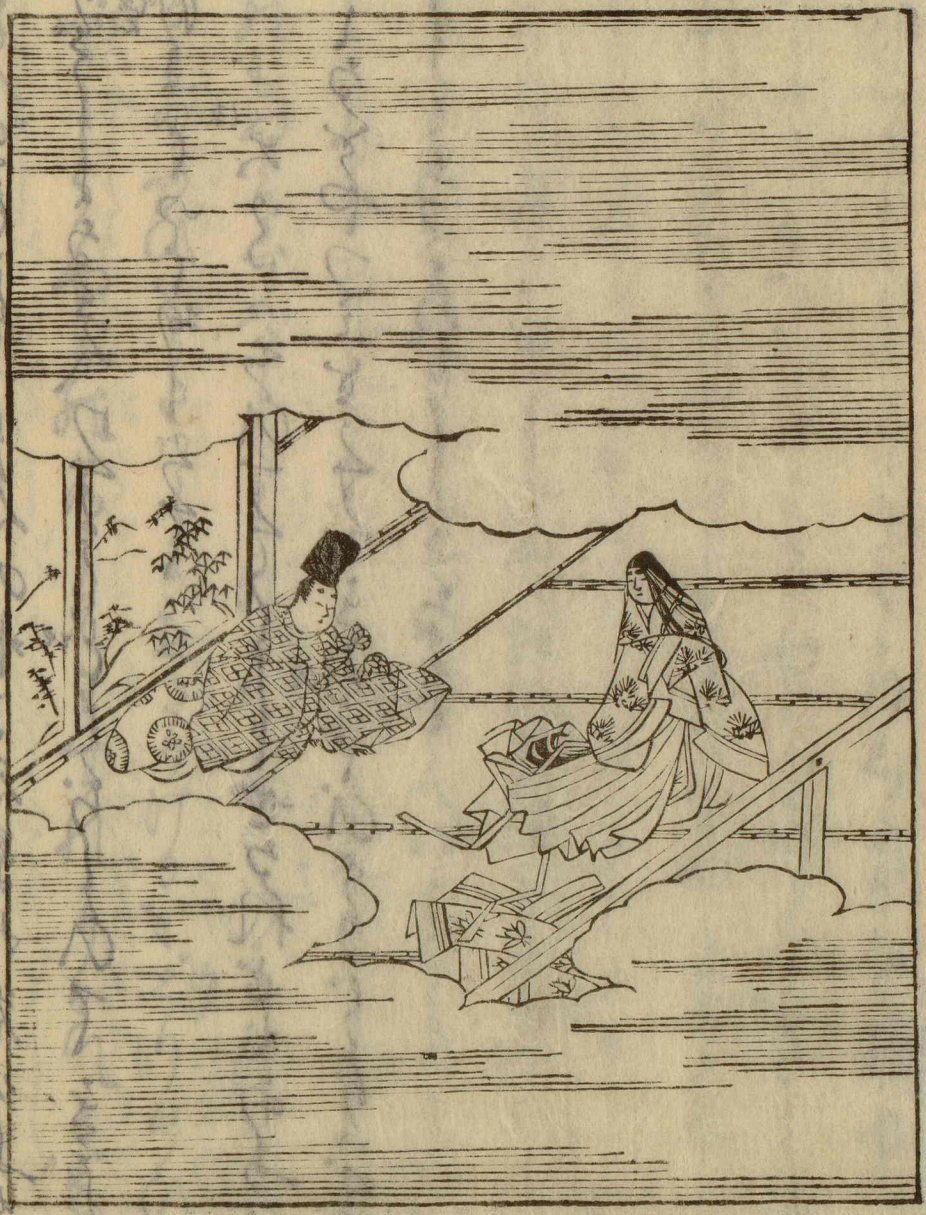


たりし人（紫）なくて、菜の女すさまじくのみ見れ
さるゝを、（詞）伝の此かぎりにてこそこうべかりかれと
のみて、（紫方ニ）いのまへのやまぶきこそ、我世にこしぬ
菜の御面なれ、ふさ此おほきさなどよ、志ちまさかう
などいなきてざりけり菜にやあらん、菜やかにまざ
けしきかるいと面白きもれにはなんありけり。
うへし人なさ、去ともしらずがほにてつねよりも
白ひかさのうつこそ衣に侍れとの給、（女三詞）此いらへ
答には去もとなる心もなく罪し給をことしも
こそあれ、心うくもとおぼさるゝにつけてもまづ
かやうのもうなさことにつけても、（紫）それことれさら

老ぬるすゑの世にうち捨られて、ワ身も人の身を
ゑつゞけしるしかなしされこんがこそかりなん。すべ
てもれく衰も、ゆへあることをも、おしはすぢも。
ひろうさめづらす。うたぐそふことれ、おさかしぞ
なるになんありけるなど。衆(地)ふくるまで、昔今のれ
抛紙にかくてもありしけべき衆をとゝ思しながら。
えり給を、女(昭君)も抛衰にさふべし。まが(源)れ心にも、おや
しくも歟にけるなと思しましふ。さてもまた
例のれをとなひに、衆中に歟てぞひるのおましに
いとかりそめにより少し給つとめてれ文なり(昭君)給に
なくも(源)ありましかれかりの世をいづくを

さりきましなど見しいづ地をめてさうぐしくさ
時はうやうまくぐ大かたまうち目のめき給おこも
あり。昔のれ君信にはいかばなく奴まるべし。夜のれ
りたより此衣がへのれ襲束なり給とて
夜衣たちかへてげりそふぢうかりきさひも
すこしやまをぬれ返し
羽衣のうすきまうけりそふよりは元輝の世ぞ
いとゞかなしき。祭の日いとつれぐまてかしふを抱
うとて。へぐ心ちよげなるんうしとてこやしろ乃
君さ夜なぐ見しやう。女房なぐいうりさうぐ
しうん。里に遊びて出えようしなどの給。中将の

中将 さもこそはいらんべの水に見まゐ光りふ志
りぞしよあるさへりすくと地もぢしひてきこ白
げ遠ん よといとおしくて
太夫 大りこはちひすくしせなれどもあふひ
しなをやつこをくすべきなど地ひとりぞうりはおぼ
しもなるぬりしさなるを



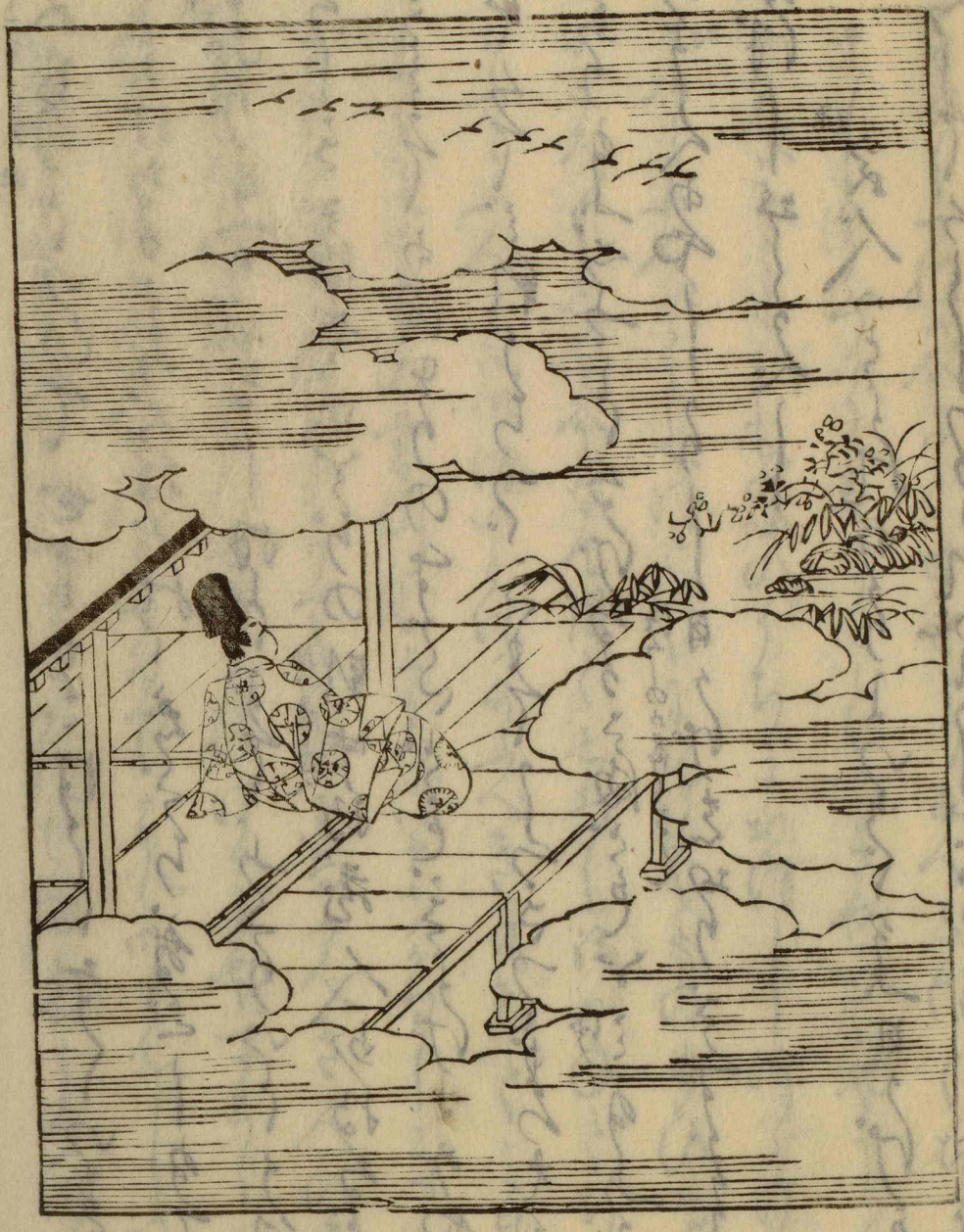
ゆるなり。いかやうにかをさて。是しめすとんとか
ぬへ。いなるまだかり。世れつゐなるぬことをかは。もれ
もん。かれ心ざしをかれたる極楽の男隨雅などこの
たびなん。供養ずべき。雅などもおまたまけるを。お
まがしそうげ。これその心くもしう。事をさたなれ
ば。またくもへてすべきことぞも。皮膚部のいりんに
たるがひてなん。もれすべきなどの給。かやうのことぞも。
もとよりとりてしあげしをさてげるはうしろや
すきつぎなれど。この世にはかりそめれはちぎりなり
なりとこゝぬふにはかるゝとしいふだらりとぞ。先にさて
ぬへる人ぞにもれ。此給いぬこそ。ふちあしう給り

それと申ゆへに、それ（源司）をかりそめなしず、命ながき
人ぐにもさやうなることは大かたすくなかりけり。
男づしの口おしさまこそ、おもこまこそはかどもを
ひろげ給はめなどの給、（地）なまごとにつけても、遣び
がたきはたらくよもされてましくて、道にしこと
いたうものおひ出ぬに、まゐれつゝ時鳥（ほとゝぎす）のかのか
まおちなきたるも、いかにしりてかと宮人へぐなしず
（源）なき人を志のぶる宵の村雨にぬれてやき
つゝ山時鳥とていとゞ元をながめ給、大将
（夕）時鳥きゝにつてなん恋のまれたち、茲を
今ぞさりと、（地）女房などあはく（あノ子）いひあはめられど、

とぐめづ。たゞねの君はやがて此とのねにさゝめしひ
給。さびしき此ひとりねの心ぐるしかれば。時ぞ
かやうにさゝめしひぬる紙。おもきしよいとけど紙
かりし。おましのあたりのいたうもたちもなれぬ
ほどにつけて。忘しきことにもあれかは。いと
あつき比。すゞしきかたにてあがめ給に。池の蓮の
さかりなるをみ給に。いかにあれかなと先あげし
しるしにかれぐもてつゞくとおかすり給に。
目も蓋にかり。目ぐらしの声もなやかなるかり。
此前のあるでしこの夕ぎへをひとりのみみぬる
もげにぞかひなかりける

つれぐとつゞるきくら寸夜の日をかぐと
がましき虫の声かれ蛍のいとゝおほうとびちがふも
夕夜(せきでん)はほたるとんでと例のゆうこともかうすぢ
まのこくちなれぬへり
よろせしらほたるとしてもかるしきは時ぞ
ともなきせなりかり七月七日も例よりもうたる
こゝおほく此あそびなどもしきまで つれぐに
なぐめくしぬて星合(かしあひ)ころ人もなし まぐ夜ふ
うう一ところおきねぬひて素だをしあけぬへ
家は前載の家いとしげく ひとどのゝ子よりと此
まてこひとなれバいでぬて

七夕のあふせは雲のよそにまとてまれの絶
にあぞ並そふ風の音さへたゞなしぎなりけれ
しも此法事のいとなまて川いたちどろは
まぎらはしげなりいまとてへにけり月日よと
ゆゞすまもおもはれてありしくしぬふ此正目
にはかくしも此人ぞこれいもねして此男陀羅
などなふぞ供養ぞさせぬふ例の霄の此をこなひに
此手水まいらすり中物の志の扇に
志こふる洞はきはもなき袖をそふをばなまれ
まてといふらん とうきつけたりをとりてこゝまひて
人こふる秋力も来る夜ゆけど物りおほりる



十二月ノ事地
又難などいひて世中そこはかとなくいまめ
かしげなるころ、夕ねどれて、あぐち、舞どしまて
法へ
まいりまへり、おなじほどにて、ふたりいとうけ
くしさき海や、れとぢの臥中ね、柏ノ者達へ 蔵人おねなど、
さきにて、お伝ぎりのすがたどもさまげにめや
をくて、これうちつぐさまてうしづさつ、まろ大に
まりまふ、せつことなげなるさ海どもを法へ こまふに、
いまへおやしかりし日かげ志あり、さすがり
おぼしまうべし
法へ
文人ハとかれありにいそぐ、今ふ日かげも
たしでくらしつるれ、ふとしせばうくて志のび

まれはをしやすとなて

源 たぞの山越(こえ)まし人とたてふとて法をうつは
れまどふれさ(地)ふしふ人ぐも。まほまもしえ(文ゟ)ひさ
ひろげねど。それとほのぐこゆるに心まどひども
とろかましず。此世(源ん)ながしをとらぬ(はナくす)れのほど紙。
いとじとそしけるまくまかい(法ノ)ゐへ家玄の葉。げに
そのありよりもをきあへぬかなしさ。やらんかた
なし。いとうたていまへ。きほのれうろまどひもめく
しく人ひろく女ぬべかれば。よくも言給ひてこ面
やかるうきゐへるうたしに

源 うきつめてこうもかひなしもほ草おなじ

雲ゐの姫とをなれ、どうきつけさせまて、これやかせ
給ひ、此仏名もことしだうりことてもとおぼしけば
まや、常よりもことる瑞秋のこゑぐなどおかれ
おぼさう、ひすゑなどきこゑしひねがふを、仏乃
きて給ひんことうたしいてし、雪いたうふりて、
まめやかに川まりまかり、導師のまうげ事を、
まへにめして、さうづきなどつねの作法よりも、
さしけせまて、ことまろくなど給ひす、としごろ
久しく来り、おぼやけにも仕て、院にも此ふんじなれ
たる此等師のうしらはやうくいろかけまてさふ
らふを、長におぼさう、例の家たち遅きなどにまる

ぬりぬへり。梅の葉のまづるに氣色ばかりしめて
雪にまてたやされたる程なりしを。此遊びなども
なぬべかれど。猶ことしまでいまれてねもむきび
ぬべさ心ち志ぬへば。ぬるよりたる抱おずじなどだる
までさせ給。まことや尊師のさうづきの川ぬでに
（源）
恵までの余もしらず雪のうちにいろ〳〵
梅をいふかぎしてん。此人し
（尊師）
子世の恵こうべき葉と祈りをきて我身ぞ
君とさもなりぬる。（地）人ぞ知ぬくよこせきこれども
（源 此仁名ノ日許とて 是もこゝろ給ふ也）
らし川。其日ぞ出ぬへる。此うち昔の此光（ひかり）にも又知ぬ
くそひて。ながたくめでたくこしぬ。此ぬりぬるよい

ひの俗いおひなり明もとゞめぎりなり年暮ぬと
おぼすも心ぼそきるゝ白詞のなやしいんこ者とく
なるべきことなるゝぎ後をさせんとおもしまあり
き給もおしきれありさまぎ添ふこぎしんことくるゝ
げるしのびがたし

添
拠しふとすぐる月日もしらぬまゝらしも
我世もなかやつきぬるつ地面ノいたちの御どれことつね
よりことなるべくとをきてさせぬふこゝろち
ぶだのれひきでもれしれぐのろくどもなどに
なりおぼしまうけてとぞ

69038
6AP78